

知識 探訪

多民族社会の横顔を読む



【第18回】

永田淳嗣

(東京大学大学院総合文化研究科准教授)

マレーシア農業の空洞化

マラッカ海峡沿いの埋め立て地に、マレーシアの華々しい経済発展を象徴するかのように高層のコンドミニアムやショッピングセンターが建ち並ぶ古都マラッカ。しかし郊外に目を向けると、耕作放棄された水田が茫漠と広がっている。マラッカ周辺に限らず、半島マレーシア各地を旅行すると、雑草の生い茂った水田や、しばらく樹液を採取した形跡のないゴムの老木、倒れかかったココナツの木や、手入れのほとんどされていないカカオやコーヒーの木など、荒れた農地の風景を目にすることが多い。1980年代以降のマレーシアの著しい経済発展、都市化・産業化の進展の中で、半島マレーシアのカンボンと呼ばれる伝統的な農村部では、農業の空洞化とでも

価格支持を与えることは難しい。ゴムやアブラヤシといった国際市場で取引される商品作物は、政府が高い価格支持を与えようとすれば、莫大な財政負担を覚悟しなければならない。農業の基盤整備に関しても、マレーシアでは、日本のように全国くまなく区画整理がなされ、小型の農業機械が走り回るといった風景はみられない。

農業従事者の高齢化や耕作放棄地の発生は、高度経済成長期以降の日本農業でもみられる現象である。しかしマレーシアの場合、社会がこうした現象を日本ほどには問題視していないようである。マレーシアの農村では、若者の農業離れという事態に直面しても、不思議と農業後継者問題という言葉を目にしない。マレー人にとって土地は資産の一部であり、相続の際に、農業経営の手段として細分化を避ける努力をあまりしない。子供が何で生計をたてていくかは、基本的に子供自身の選択であり、親が子供を農業に縛り付けるということはない。

またマレーシアでは、社会全体としても、経済が発展を遂げ農業部門の経済性が相対的に低下していく中で、農業活動の規模もそれなりに縮小するのが自然であるという考え方が支配的なようである。環境の変化に適應した変わり身の早さという点では、日本よりもマレーシアの方がはるかに先を行っているのかもしれない。

【プロフィール】

1964年、愛知県生まれ。東京大学大学院理学系研究科修士、博士(理学)、東京大学助手、助教授を経て現職。1994～96年の2年間、マラヤ大学共同研究員としてマレーシアに滞在。専門は人文地理学。沖縄をはじめとする日本国内、マレーシア、スマトラなどをフィールドに、農業的資源利用と社会変動に関する研究を行っている。

経済発展とともに農業離れ進む ブミ政策でマレー人の若者去る

呼ぶべき現象が顕在化している。

こうした現象の直接的な原因は、マレーシアが経済発展を遂げていく中で、農業部門の経済性が相対的に低下し、若者の農業離れが進んだという点にある。とりわけ1971年にはじまる新経済政策(NEP)の下で、雇用や教育などの面でマレー人を優遇するブミプトラ政策が採用され、農村人口の主体をなしてきたマレー人の若者たちの間に、農業以外の産業部門への就業機会が急速に拡大したことが、若者の農業離れに拍車をかけることになった。日本とは大きく異なるマレーシアの農業政策も深く関わっている。マレーシアでは、日本のコメのように、政府が主要な農産物に対して高い価格支持を与えることをしていない。安くて品質の良いコメが大量に輸入されている状況の下では、国内産のコメに対して高い